

1.774^p 6/13

新(2)-198⁷
纏と書いた

川材カン 772頁
纏=纏783

電 ぐれのあ
「呉」

バナナ論争

■ 邪馬台国の候補地の一つとされてゐる奈良

具・桜井市の纏向遺跡で大量のバナナ

藍(花粉)が三世紀中ごろの溝から出土

た(写真図版273・274参照)

■ ベニバナは赤の染料・化粧の紅・生薬・

防腐剤等々用途が広い。

■ これまで六世紀後半が日本国内最古と

されてきたが今回のベニバナ発見は約三

〇〇年さかのぼる。

■ 国内最古級の纏向石塚古墳(三世紀初め)

中ごろ)の南約五〇メートルにあった溝跡(幅一・

五メートル、深さ一メートル)から木製農具や土器等と

共に見つかった。

■ エジプトの高原地帯が原産地であるバナ

ナが弥生時代の日本で自生してゐた筈は無

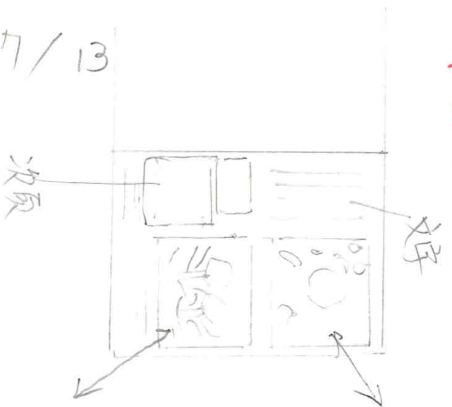
いから栽培もしくは大陸から

輸入されてゐたと思われる。

・カラー

右頁の右端、JFにゆき
大きく掲載下さい。

・次頁の字表および地図を、
右頁の左下に配置し
下さい。



1809 } 1309
ゴ4 } 1409
ゴ4 } 1509
上 纏向遺跡で見つかった3世紀
中ごろのベニバナ花粉ニ奈良県
桜井市教委提供 下 満開になつた
ベニバナ畑。夏に黄色の花をつ
けるニ山形県提供

写真図版 273 ベニバナ

『朝日新聞』平成19年10月3日付「最古の花粉出土」染色利用か 参照

・カラー
・左頁



厚さを小さくする。



原寸は、68センチです。(参考まで)

ベニバナ花粉が見つかった纏向遺跡内の溝跡（左側の溝）＝91年7月撮影、奈良県桜井市教委提供

写真図版 274 ベニバナ花粉が出土した溝跡（左側の溝）

1.774p- 8/13

『朝日新聞』平成19年10月3日付〈^{まきち}纏向遺跡のベニバナ花粉〉参照

1774-9/13

バナナ論争13頁
紙の裏51頁

22反す

【図】もとく 検出された花粉は「一面がバナナ畑と見做さなけ小ばならないほど大量であり、高温多湿の奈良盆地でバナナをたくさん栽培できたとは考えにくい。バナナを加工する染織工場の溝の上流にあり、染織後に溝へ流された廃液中の花粉が沈殿した可能性が高い。」
という。〔朝日新聞〕平成十九年十月三日付へ最古の花粉出土で染色利用かへ「綿白遺跡のバナナ花粉」参照）
〔図〕魏志倭人伝に「正始四年条に「倭王が魏の朝廷へ「倭錦・絳青縑（赤青色の織り）を詰めて細かく織った布」・「縹衣（真綿を引きのぼろで作った綿で出来ている衣服）・帛布（白い絹の布）」を上献した」という。（以下「邪馬台国新聞」全国邪馬台国連絡協議会会報「平成二十八年（二〇一六）十月三十一日発行」十三頁へバナナ論争）安本美典氏執筆参照）

④ 絳青縑^{じようせいせん}の「絳^{じよう}」は「あかし」とも読み

べニバナを指す可能性もある

⑤ ところか「三世紀以前(卑弥呼^{ひみこ})の時代以前

の弥生時代において「絹^{きぬ}」が出土するの

もつぱら北九州であって「奈良県ではない

⑥ 簡単に言えば「

① 弥生時代にかざると「絹^{きぬ}が出土^{ゆっど}しているの

は福岡・佐賀・長崎の三県に集中^{しゅうちゆう}してあり

② 前方後円墳の時代(四世紀以降)になると

奈良や京都からも出土^{ゆっど}はじめる

という。へ「絹の東伝」布目順郎、小学館

一九八八年刊

・布目順郎氏は「絹^{きぬ}の東伝」のなかで「絹^{きぬ}

を出土した遺跡の分布から邪馬台国の所在を探^{さが}

る」という見出しのもと「邪馬台国の時代

と「その前後の時代を通じての、絹製品出土

地を、くわしく列記したうえで次のように

述べる。

「これらを通観^{つうかん}すると「弥生後期の絹製品

を出土した遺跡も一くは古墳はぐすべ北九州

小林カミ 760^年へあかし濃い赤色

前2頁末にハバニ

1,774-11/13
トW

にある。
いたかつて下流後期に比定される邪馬台
国の所在地として「絹を出した遺跡の現時
点での分布からみるかぎり、北九州にあつた
公算が大きいの。
わか国へ伝来した絹文化は「はじめの数百
年間、北九州の地で醸成された後、古墳時代
前期には近畿地方などへ伝播したと考えられ
る。
と推察している。
トル
四ハニバナの花粉が出土したとしてもハニ
バナが下かならずしも絹製品を染めたことに
はならない。
・奈良県の「絹以外の繊維製品を染めた
可能性が大きい。当時の人々も衣服をき
ていたのである。その衣服を染めただけの話
である」とみられる。
ともいう。『邪馬台国新聞』全国邪馬台国連
絡協議会会報「平成二十八年（二〇一六）十
月三十一日発行」十三頁ハニバナ論争」参

尾大不掉

← 前頁 14 行 551

令和2(2020)10.7E) 2510.5(46)

④ 1.774^D · 6/13

のではなからうか

⑦/178-3

1775^P - 1/3

$\frac{1}{\sqrt{2}} = \frac{\sqrt{2}}{2}$

意匠之佳
46P 43P 第3行

差 大 7703^P 序 大 7740^P
 吳 漢 吳 漢
 三 三
 三 三
 1667-
 タイトル 853^P

② 一かゝる庶人の男女は皆露介（後段）（髪をかみ）をむき出（た）

た。	7
そ	7
水	帽
は	(
中	ほ
国	う
の	し
胡	頭
公	に
頭	か
(	ぶ
不	る
明	も
)	の
に	)
似	と
7	1
い	て
た	い

① 富貴者で、後段と前段に分けて考えてみたが、
 貴族達は、変わった模様の複
 雑な縫取りをした織物や、色とり鮮やかな錦をもつ

り
 錦きん繡ゆうは錦きんと刺繡しゆうをほどいた織物おりもの
 糸いとは「いろど」

雑采爲帽。 似中国胡公頭。
 と記されてゐる。
 *おそらく魚養の口魏略に
 記されてゐる。

夷伝・倭条には	な 602
風俗不逞	紀のま
男女皆露紒	な 1915
富貴者、	な 602
以錦繡	紀のま













時代はかたり下るが、南朝梁（五〇二）五

服ふくにも、
 当然とうぜんなから、
 差序さじよがあつた

などと述べている
 ちやうど
 1435
 帽(被物)
 もの

(ロ) 尊卑各々差亭有り
(イ) 尊卑差有り

えん 348
447

魏志倭人伝
 貴人の冠りものと衣服

小鉢 34
 帽 ^なほう
 (被物) ^{かぶりもの}
 147^p

8月 1786^h
の11=7

①1782^P 老人の
タイトル
こころは、貴人についでのみ
本入

1775^P - 2/3

うわき うえき
上へ 上着 220¹
金1,778^P

太いコナ

て 述べたいや
* 尚、庶人を示す人物埴輪に
ついては、追う

ことか分かるや (写真図版 275 276 277 278 280 参照)

る

1776^h - 1/8

1776^h - 6/8

部あたり加かぶさるような上着を着用して
二股になった袴をはき、その上に腰

(2) また、上と下に分かれた服を着ている

をかぶっている

(1) ひさしの無い冠や、ひさしのついた帽子等

男子は、

並べられた人物埴輪を見ると、支配層の

二方、六・七世紀頃作られ、古墳にたて

て結ぶこととしていたのであろう。(前段)

1811^P - 6/6
1852^P 米
1782^P 米
1852^P 米

ところで、古事記の「伊耶那岐命の禊」条に、

「伊耶那岐命は、紫の日向の橋の小門の阿

岐原で禊ぎ被われるとき、杖・帯・囊・衣

禪(男子用の服の割れた袴)・冠・左右の

御手の手纏(手首に巻く装身具、真珠などで

飾られてゐる)を、次々に投げ棄てられた

と記されてゐる。(「古事記」新潮日本古典集成、

四〇二四一頁注記参照) 下(禪)と

つまり、伊耶那岐命は冠をかぶり、上(衣)と

に分かれた服を着てゐたという

この「伊耶那岐命の描写」は、人物埴輪が作

られた頃からさらに遡った三世紀初頭、ある

いはばそれ以前の倭国の貴人(支配者層)の有

り様を示してゐるのではなからうか

へ弥生時代のその当時すでに、貴人の男子

は冠をかぶり、上・下に分かれた服を着用して

ゐた

ということを示唆してゐるのだと思われ

なお、人股の割れた袴は、縫わなければ

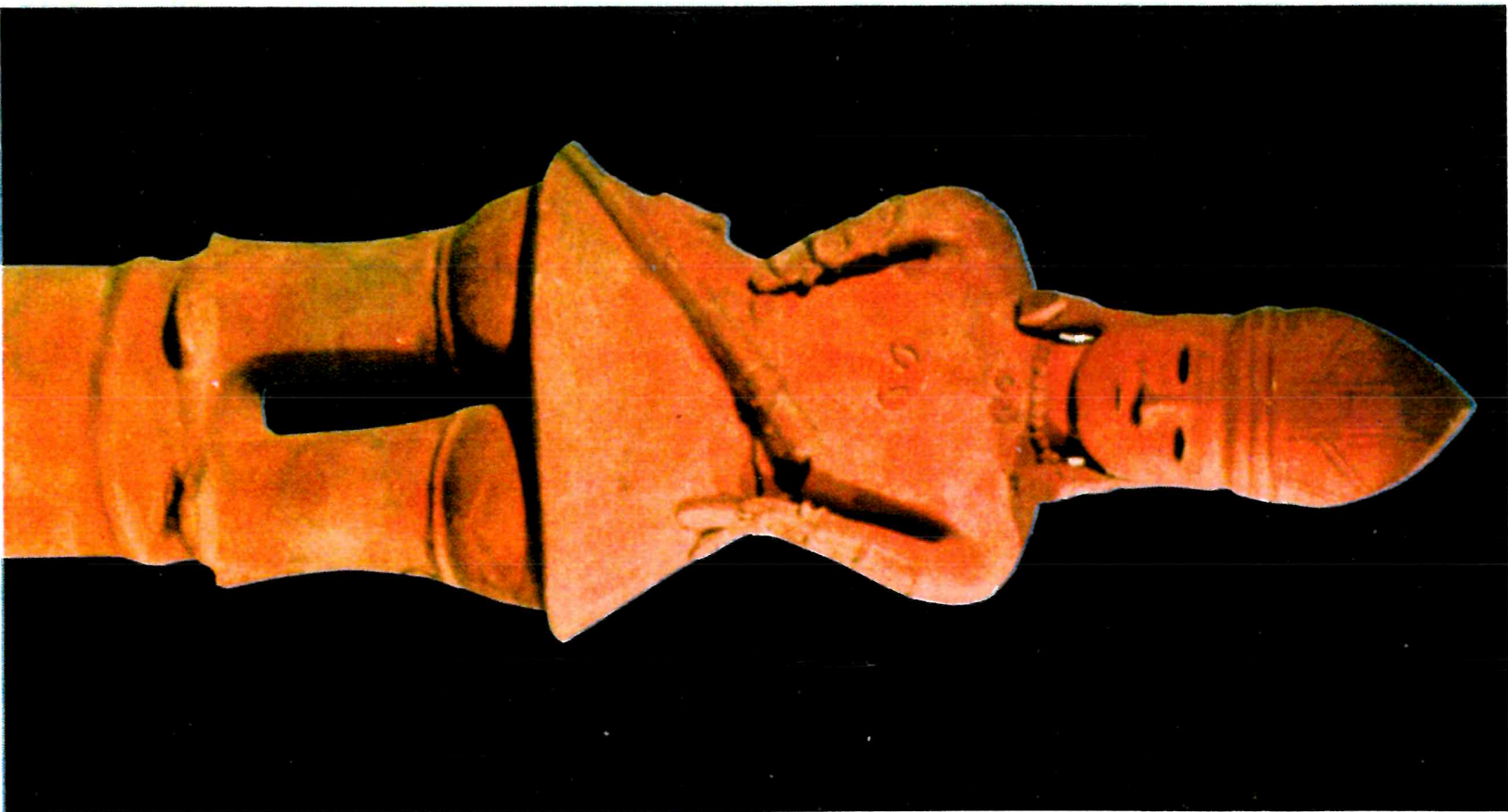
作れないように思われる。横幅の布を但々結

束めて作るは困難である。(魏志倭人伝参照)

・右奥の右上に
配置。

・赤味を少し
入して下さい。

1,776^P - 1/8



556

左記
④ 1826^P 19⁶⁵

④ 1829^P 1/4
位上、右

通巻の力士
④ 1802^P 2/5

1304
写真版 275 盛装の

男子像
<重文>

群馬県伊勢崎市波志江町
六～七世紀 高さ131.5cm
箱根美術館

1204

『増補山田達宗表』

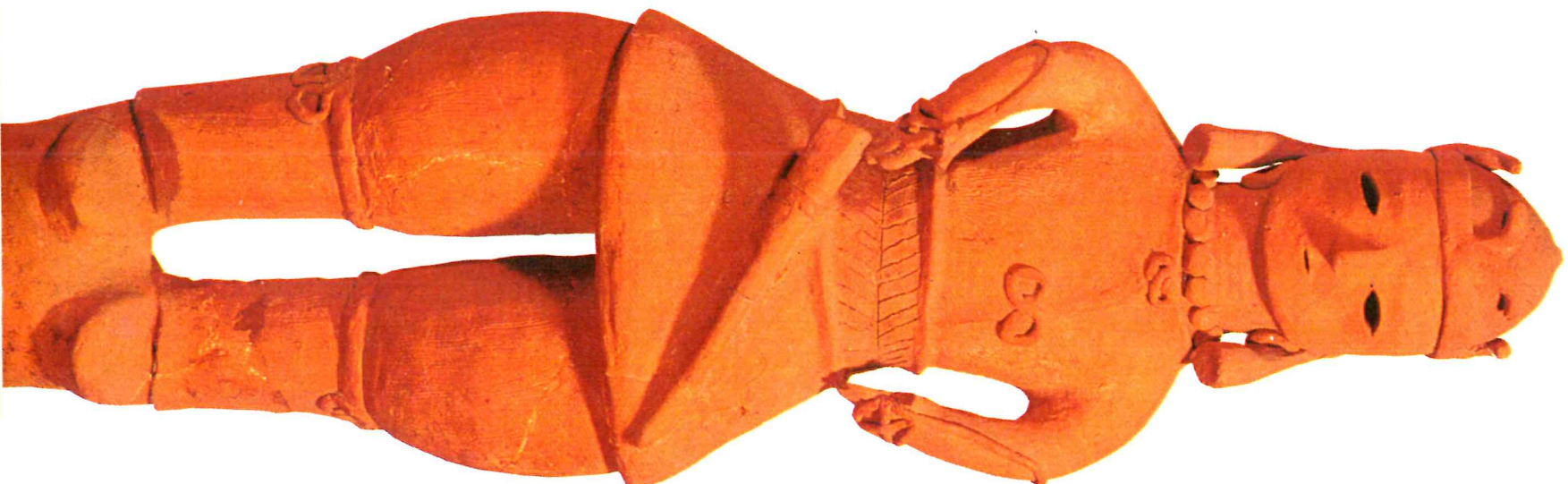
保元社、昭和53年3月5日発行、65頁参照。

上表、表の正七かぶる 西1779^P 1654

・右奥の右下に配置。

・赤味を少し
入すに注意。

1.776^p - 2/8



557

1304

写真図版 276 盛装の男子像

1204

図説 はにわの本山 監修 群馬県立歴史博物館、1996年6月1日発行、65頁参照。
・ヤリノヲを取り付ける場合もあつた（たゞうか）。（写真図版 298 参照）
①1809

。右肩の左上
に配置。

1.776^P - 3/8

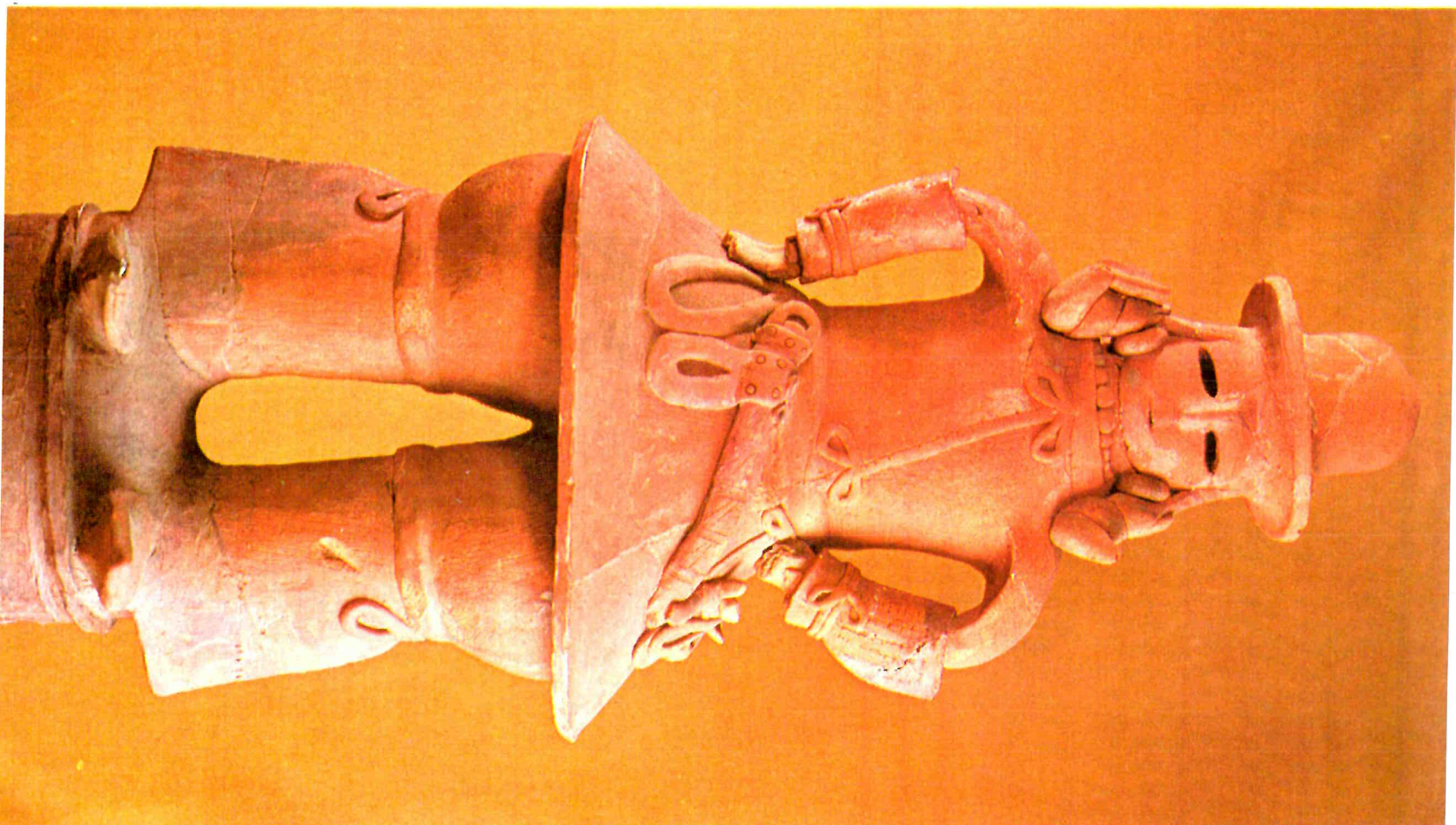


558

1304
1204
『図説おわの本』 装の男子像 群馬県立歴史博物館、1996年6月1日発行、65頁参照。

右肩の左下に
配置
赤味も少し
入れている。

1.776^p - 4/8



縄文14号埴土
ハニ
左前の衣裾

559

1324
1224
埴輪版 278 盛装の男子像

群馬県太田市空泉 6~7世紀
高さ 124.2cm 東京国立博物館

『埴輪』伊達宗泰、保育社、昭和53年3月5日発行、64頁参照。
1124
衣服の合わせは左前で、紐留めが見られる。靴の先端が反っている。

由1810

・左頁上半分に掲載

1,776^p-5/8

④1798^p-1/6 849



560

1304

写真図版

279

安座する男子

八幡原古墳

群馬県高崎市八幡原

1204

〈重文〉

六〜七世紀

高さ75.0cm

『埴輪』

伊達宗泰

保育社

昭和53年3月5日発行

62頁参照

④1798^p-1/6 849 新武蔵の冠 ④4420^p-4/2

埴輪の世に 79 44 ④2385 高木 11に 8 高木 44

・カラー

・左頁の下半分に
掲載

・紙の縁を目印に
1.776P-6/8



1786-3/4 →
と記

1309

写真図版

280

葬送の行列

『埴輪』伊達宗泰 保育社 昭和53年3月5日

発行 72~73頁参照

葬送の行列

千葉県山武郡横芝町 姫塚古墳

七世紀 芝山はにわ博物館

馬子と馬、それに人物埴輪群が続いている。

561P

枠HV(5L-HV)

・カラー

・右側の右半分、上～下迄、
縦1列に長く配置
して下さい。

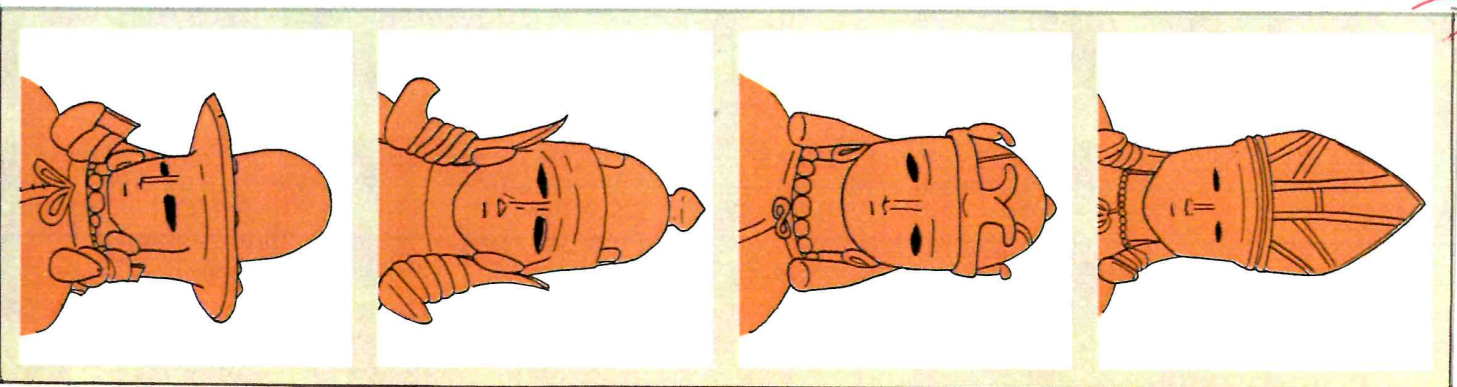
・図面を限数一杯はみ出して
大きく掲載下さい。

1,776^p - 7/8

赤いふりかけ
130G コ4

第284図 貴人男子のかぶり物

・盛装は男子のかぶり物には冠や
帽子が見られる。銅に金鍍金は金銅
製のほか、革製の布製のかぶり物も
作られたのであろう。



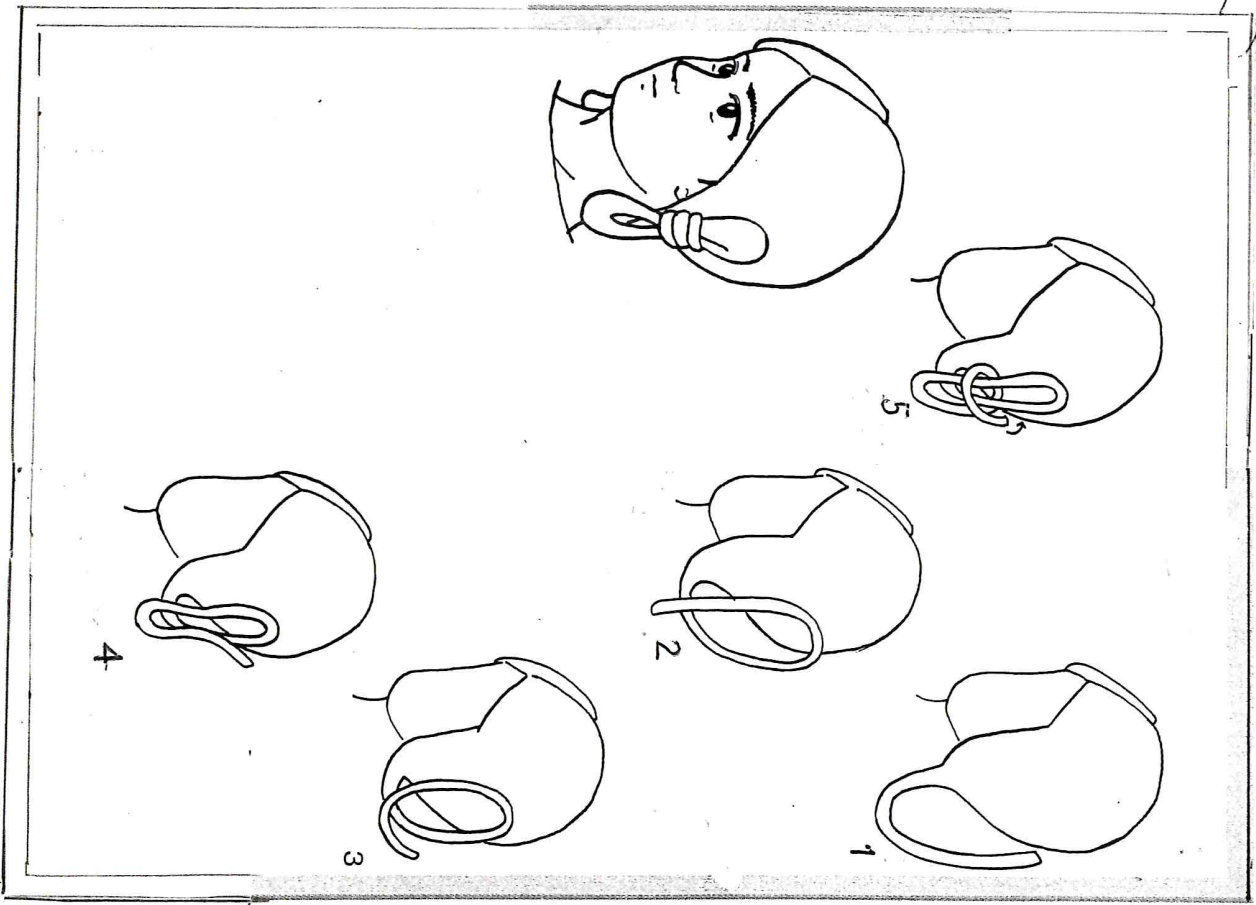
枠不要。
文字は、左下にはみ出しても可。

1209コ4
図説はにの本山群馬県立歴史博物館
1996年発行、63頁参照

材料

・前頁図の左半分に
西に置いて下さい。

・図面を限数一杯
はみ出して大きく
掲載下さい。



1. 776P-8/8

中心にわけ
1366ゴク

第285図 男子の髪型

・貴人男子の髪型は、髪を左右に分け、上図のように結んだ「美豆良」が一般的である。
・盛装の男子像には、肩まで垂れた美豆良に飾り紐を巻つけたものが椅子座・彈琴・
・跪座像などの人物には、3つに分けた髪の後髪は長い垂髪にしたものがある。

・また、側の髪を短く左右に振り分け、下の髪を長い美豆良に結ぶものもある。
・農夫などの髪型は、左右に振り分けた髪を小さく結んだ「上サ」美豆良である。
・男子植輪の結髪方法は、身分や職業によって、相違があったと解される。

『図説はにわの本』群馬県立歴史博物館、1996年6月1日発行、66頁参照
12. 666ゴク

→ H3.9.16 (用) ⑤
(敬老の日の振替休日) ⑤ 1774P
ちやうど 1435P
着 用
⑤ 1774P

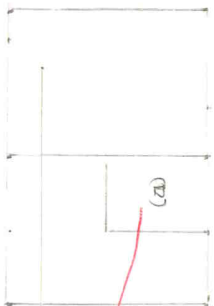
うめき 衣 220P
かみ 被 土 446P
1.777P

「新明解古語辞典」金田一彦
⑤ 1794P

のう 云 1738P
山林 498P

＊

と、この風習は、その後の、貴族の間
で伝統的に踏襲されていったようである (第286 図参照)
東帯 (天皇以下百官の正装の礼服)
衣冠 (東帯につぐ装束) 公卿が朝廷へ出む
直衣 (平安時代以来の天皇・貴族の常服)
狩衣 (平安時代には公家の常服、鎌倉時代
以後は公家・武家ともに用いた)
等々、貴族が着用した装束は全て、冠お
よび上下に分かれた服から成っている。
(「新明解古語辞典」金田一彦、三省堂、
付図4) 「広辞苑」岩波書店。「新選漢和
辞典」小林信明、小学館 (参照)
なお、この小の貴族の装束は、
へ上に着用する衣が、袴のうえに被さる
というところが特徴的である。
先に引用した口古事記に伊耶那岐命の禊
条において「帯」「衣」「禪」の順に投
げ棄てられていて、共通性がうかがえる。



右頁の左上に配置して下さい。

左へ移動

巻縷(けんえい)

老懸(おいかけ)

開腹の抱(けつてき)

太刀(たち)

忘れ緒(わすれを)

表の袴(はかま)

靴の沓(くわのくつ)

左へ移動

胡篋(やなぐひ)

半臂(はんぴ)

1778-2/2
b/2-0661

566

(口)

束帯(武官)

束帯(武官)は天皇以下文武百官が朝廷の公事に着用する正服。衣冠・直衣を
宿直束束というのと文対比。昼の束束という。右へ移動

花さうりく

かる 1778.11.11

(下段)
右側の右端に配置下さい。



1778^p - 3/7

567

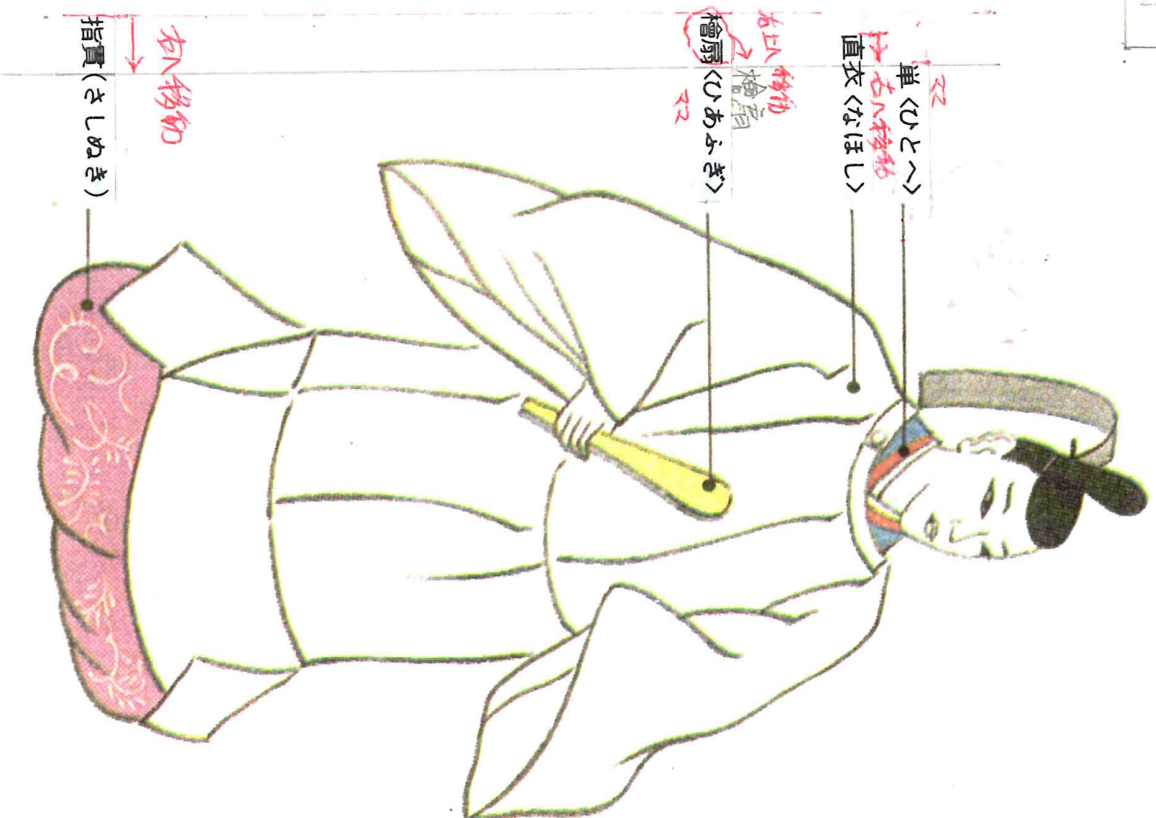
衣冠

最高^(せいそう)の正装^(せいそう)「束帯^(そくたい)」に次^(つぎ)ぐ正装^(せいそう)である。(「^(いかんそくたい)衾^(い)冠束帯^(かんそくたい)」参照)



右肩の下段中央に配置して下さい。

文様の頭を揃えて下さい。



43-8661

568

(二) 直衣

1304 天子・摂家以下公卿の平常服である。

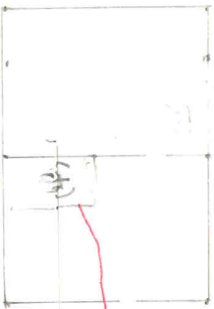
・形状は衣冠の袍と全く同様だが、衣冠とちがって位袍でなため当色以外の

色を用いた。

1404 第286図 平安時代以降の貴族等の衣服

1304 新明解古語辞典 第3版、金田一春彦、三省堂、2001年1月10日

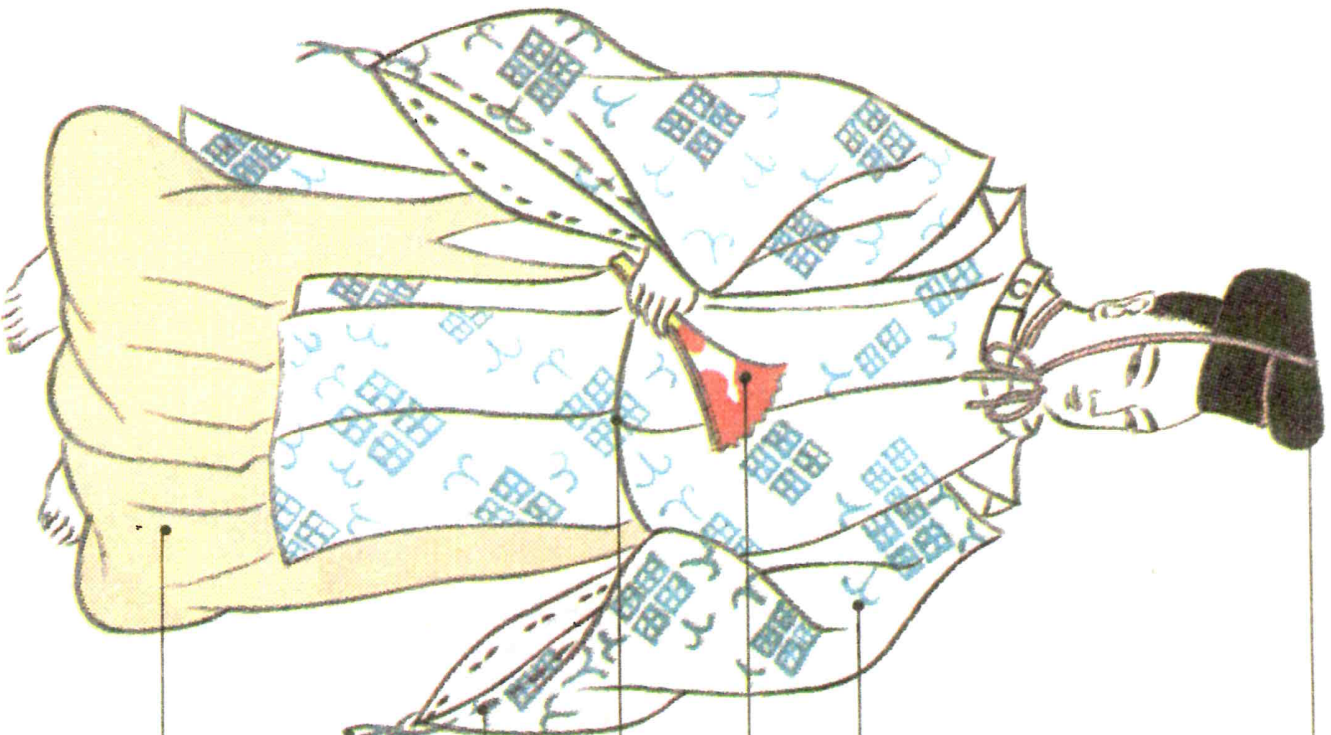
発行、口絵参照



右肩の下端左端に配置して下さい。

左へ移動

風折りの烏帽子<かぶさきり>



狩衣<かりぎぬ>

蝙蝠褄あばばり

宛腰あてこし

袖活そでぐり

露つゆ

指貫さしぬき

1778^p 5/7

569

(ホ)

狩衣

(もと、狩などの時に用いたからいう)

大にかりぎぬ

- 平安時代の公家の常用略服である。



右肩の上段右端に配置
(い)と同程度の背の高さにして下さい。

宝1,786-¹/₄
農太の埴輪参照!



1778^p-6/7

宝1,783^p中央 570

(N) 白張り

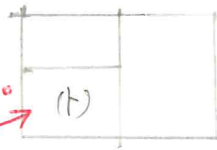
- ・^た紺色^き (紺色)
- ・^た院司^{いん}回^の東宮^{とうきやう}回^{せう}授^{かん}関家^けなどで^{きん}雑役^{ざつやく}回^{かい}走^{そう}り使^{つか}いた任^{にん}じた無^む位^いの職^{しやく}など^なか
- ・^{きん}着^き用^{よう}は^は白^{はく}布^ふの^{きん}狩^{かり}衣^{ぎぬ}で^{きん}服^{ふく}を^き着^きたものと思^{おも}われる
- ・^{きん}貴^き人^{にん}の^{きん}服^{ふく}装^{そう}に^{きん}準^{じゆん}じた^{きん}服^{ふく}を^き着^きたものと思^{おも}われる

ト12

第1図 平安時代以降の貴族等の衣服

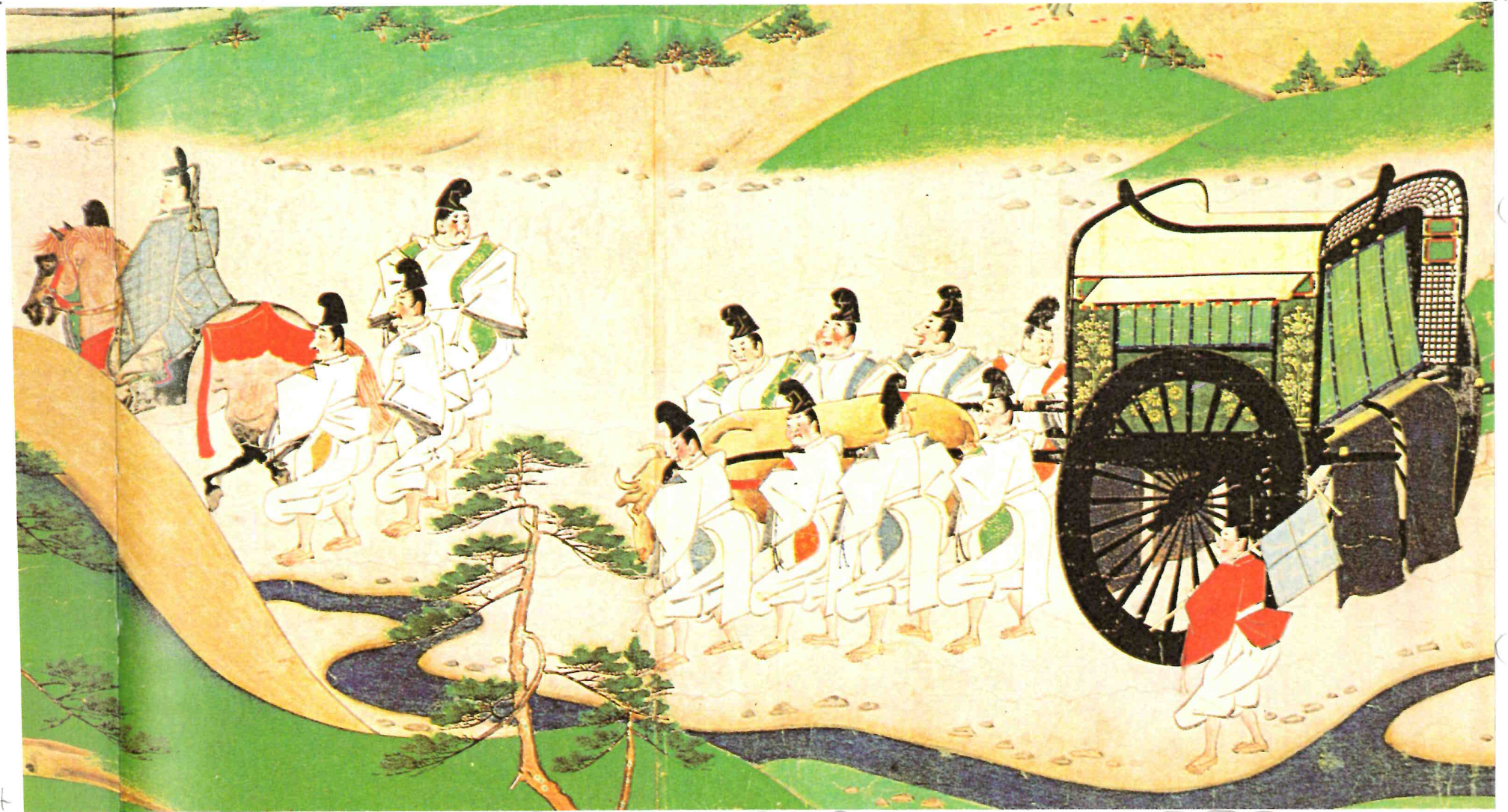
『新明解古語辞典』第3版、金田一春彦、三省堂、2001年1月10日発行、P口絵参照

・カラー
 ・限度一杯、はみ出して掲載下さい。
 左頁の下半分に掲載する →



1,778^P 7/7

小作人 上げ^み 美豆^み 豆^ま
 ① 1,786^P 2/4



第287回 東三条院^{おの} 夢想^{みやう}によりふたたび石山寺^{いしやま}に詣でる^{もつ}。(こは、逢坂山である)

『石山寺縁起』日本絵巻大成18 中央公論社 1989年7月25日(4版)発行 34~35頁

・大勢の白張りたちが お供をしてゐる 571

他(12~13頁 21頁 29頁 30~31頁等)参照

可飾 68 美づら 1765, 1783 小林 93 96 100 101
 「地輪」 1779 実の人の髪が短かった 春秋左氏 383 小林 97 100 101

参考 1861 「地輪」 ニューサエス 貴人 1773-36 左前 「後代を流す」 84
 12~13頁 備へ 1772 資料集 ④-12

う。	髪型は、男子は美豆良、女子は島田髻を結	飾り・耳飾りなどをつける。そして、男女共	被さっている。装身具として頸飾り・腕輪・髪	上着を左前に合せ、下半身にはスカート状の	正装した貴人の女子は、男子とほぼ同様の	に被さった冠・帽子などをかぶる。実際に、	で膝下あたりをしばる上着は、禪のうえ	身には太いズボン状の禪をはき、紐（脚結）	腰には大刀を佩くために紐い帯をつけ、下半	を左前に合わせ、通常二ヶ所を紐で結んでい	正装した貴人男子は、筒袖、丸首の上着	的物語っている。後代の後人の服飾を流	後代の後人の服飾の原形になったのたろうか	後人の物にみられる衣服の形式が、
----	---------------------	----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	--------------------	----------------------	------------------

1,780^P

ニューサイエンス
上野芝色の本
12〜13^P

小林120^P

大分2433^P

1980^P

あたりで東ねたもので、その長さによって
下げ美豆良らと口上げ美豆良らにわけられ
身分の高い男子像は肩にゆったりと垂ら
た下げ美豆良、身分の低いものは上げ美豆
良を結っている。
女子の島田髷は、現代の「島田」に似てい
るのと、ころから名付けられたものである。頭
頂部で一つに束ねた頭髪を、ふくらかに折り
かえして、大きな髷の形とした髪型であるが
埴輪の表現上では、髷の形と似た髪型であるか
分銅形の髷として表わされる。「埴輪」
大塚初重、ニューサイエンス社、一二一三
頁。「埴輪」小林行雄、平凡社、九三頁、一
一七、一二〇頁参照。
*

⑤ 1765^{p-3/2}

庶民の服装

74 P 1929

■ 倭国の庶民は、どんな服を着ていたのだろうか。

■ この当時、倭人達の支配下にあつた庶民と

① 縄文人の子孫達

② 拔歯の風習を持つ南支那系^{南支那系}の長身人の

子孫達 ^{扶余系}

③ 縄文晩期に渡来した殷民の子孫達

④ 当初の弥生人の子孫達

⑤ 支配権を倭人に譲り渡してしまった箕子の

子孫達

などか居た^トと思われ。

・ ーかしながら、統治者となつた^ト左倭人

達は、こゝろ各種族の独自性をあまり認めず

種族間の混血を強引に押し進めていたように

推察される。(第五章へ六つばかりの種族

第二十七章へ混血)の項において既述

■ さらに倭人達は、庶人を皆同等とみなし、服

1,781^p

⑤ 511^{p-3/2}

411^p ⑤ 511^{p-1/2} 514^{p-3/3}
タイル ⑤ 1768^{p-1/3} ⑤ 513^p 1769^{p-1/4}
⑤ 1769^{p-1/4} -3/2 1766^{p-3/3}

1,783¹

④ 1765¹- $\frac{1}{2}$



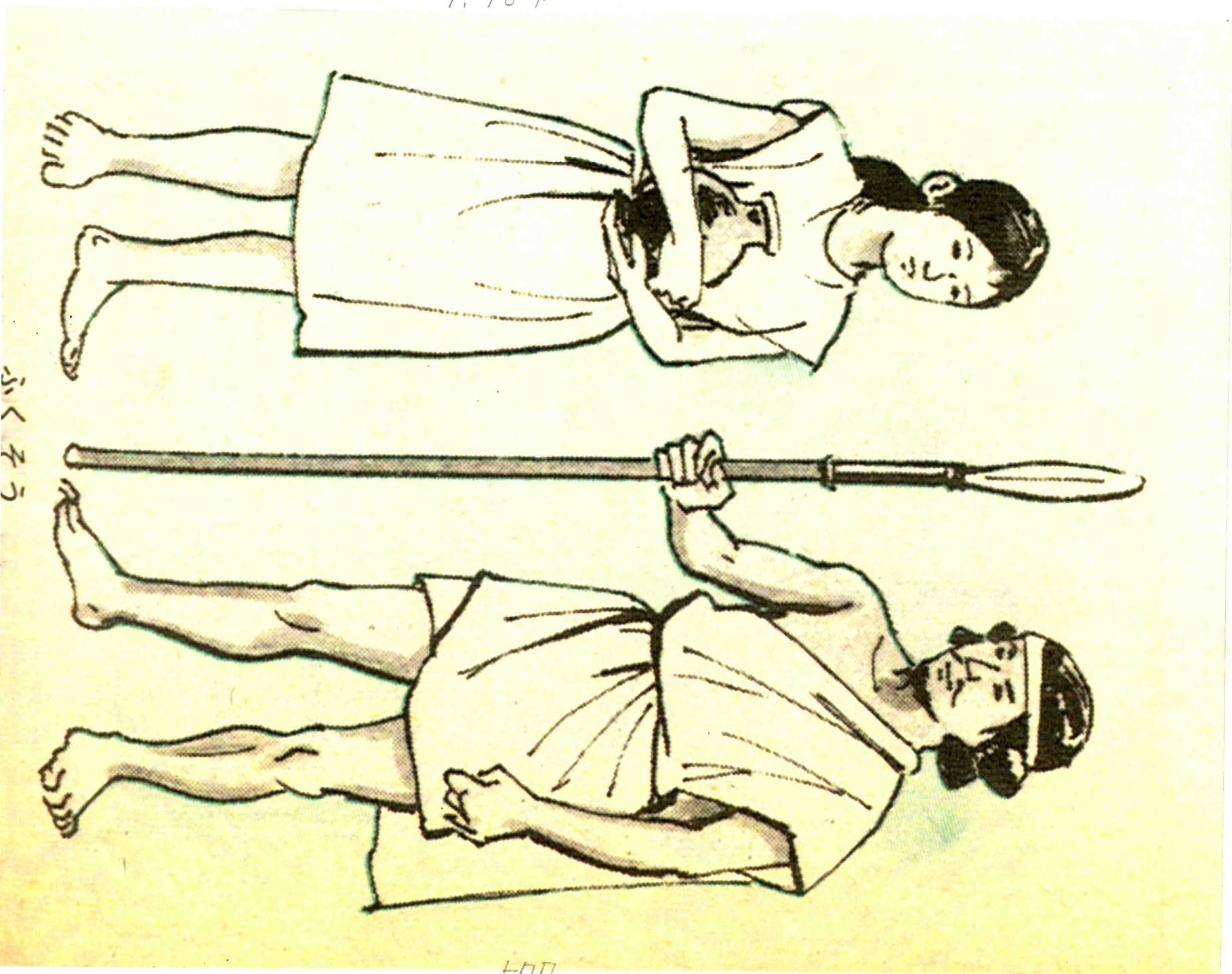
当時の服装 (想像図)
「小学社会」6年上、大阪書籍(株)

と理解されていようである。(「小学社会」
六年上)大阪書籍(株)、昭和五八年二月五日発
行、三十二頁参照

第 288 図

つまり、(貴人も庶人も)
へ倭国の男達は皆、髪をむき出しにして結
び、木繻を以って(鉢巻や、ほかむり等の
ようにくるりと巻いて)頭に招け、そうして
横幅の布を、但々結束して相連ね、略々縫う
ことなしに、身に纏いつけた。
倭国の婦人(おんな、嫁入りした女)は
ざんばう髪をまげて結び、單被(ひとつのか
ぶりもの)の如くに衣を作つてその中央を穿
ち、頭を貫いてえを衣た。

1.784P



ふくそう

577

第288回

従来想像されていた弥生時代当時の倭人の服装

字はナ

『小学社会』6年(上)大阪書籍(株)、昭和58年2月5日発行、22頁参照

1561P
407P
947P

1,785P

1778-6/7/7 1784 69下

但々結末、相連ぬ、略々縫うことなりしと
記され、描写と、後代（七世紀頃）の
貴人の男子の埴輪に見らるる衣服とは、あま
りにもかけ離れすぎている。
また、庶民と思わゆる男子の埴輪を見
ても、馬丁や農夫らは「上から下（腰あたり）まで一統
きの服を着ていたようである。（写真図版
282、283、284 参照）
*もつとも貴人に雇われた農夫（小作人）
や馬丁（馬の口取り）らが「第10回へ白張り」と同じく
貴人の服装に準じた服を着、小さな「上げ美豆良」を結
っている様子の表現なのかも知れない。（写真図版281、282、283、284 参照）
かなり省略されている可能性はあろう。
庶民を示している埴輪の服装は①
↑↑↑だが、貴人の男子像も、↑↑↑↑↑庶民
の男子像も、横幅の布を但々結束して相連ぬ
略々縫うことになり、作った衣を着ているとこ
ろを表わしているように見える。
①
解の仕方に誤りがあるので、はなからうかや
（*）

・ 左肩の右肩上に
配置して下さい。

1.786P- 1/4



579

「地輪」奉
伊達宗奉
83頁

写真図版 281 農夫

群馬県佐波郡赤堀村出土
高さ92.0cm
7世紀
東京国立博物館

『地輪』(佐波郡) 平凡社 昭和49年8月5日発行 44番参照
・ 金鎖を肩に、鎌を腰に、手を胸に当て笑っている。収穫を喜ぶ「農民の姿」を素朴に表現している。
・ 「イヤリ」を取り付けているのだらうか。

15th
White
1, 7, 8-5/9
- 1/4

580



15日
*第286・287回（白張リ）
（命題）

群馬県太田市由良
六～七世紀 高さ42.5cm
群馬県立博物館

保育社 昭和53年3月5日発行 83頁参照

小作人

男などに

7

11.11.2

17

無
KAI
又

七

五七命

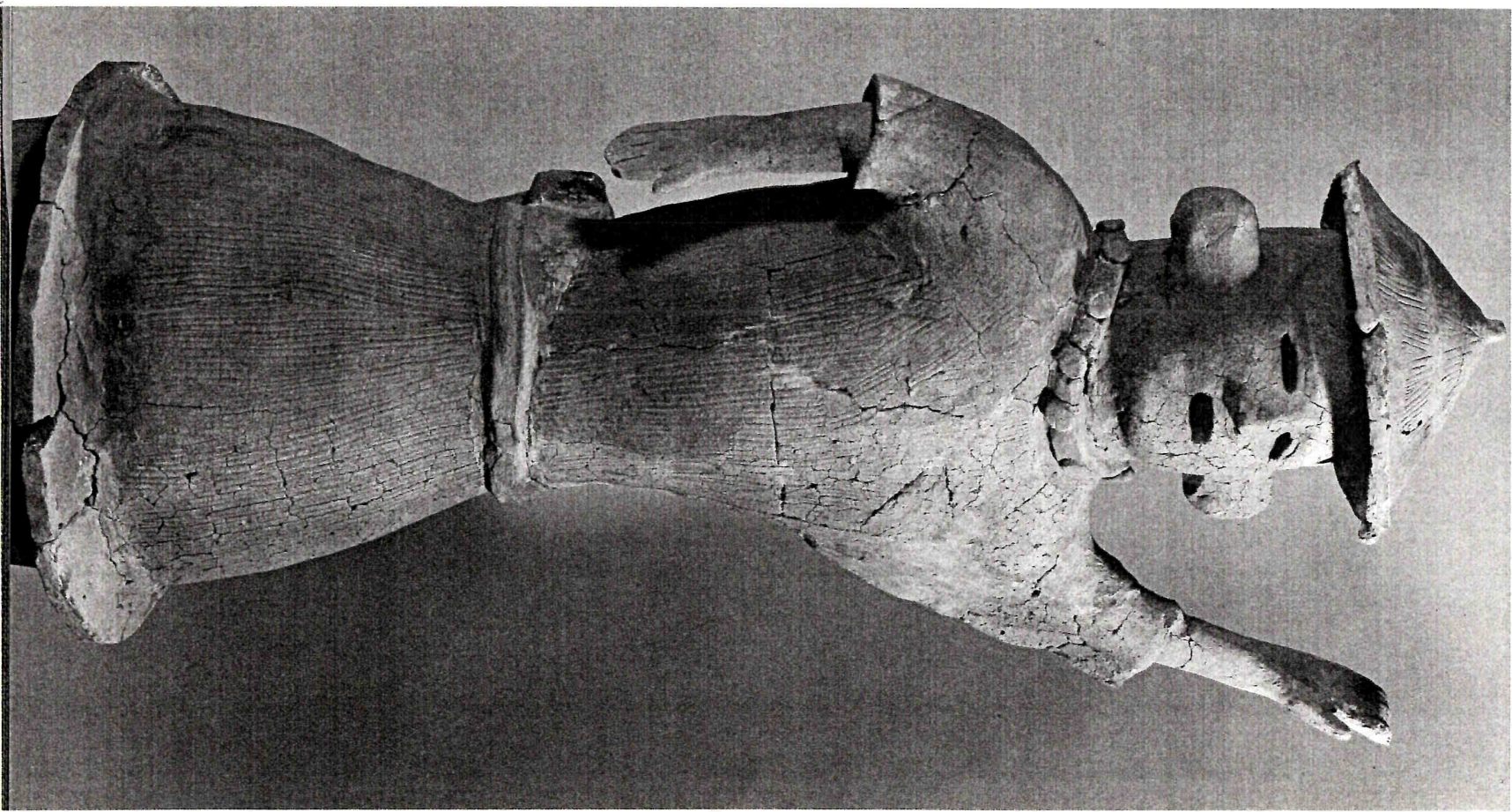
14)たの

だろ(う)か。(＊~~被~~配者になつた者らの「古来の髪開つた」とは考えに(い))
 外人が「工作」を財産だと思へいたから、うした塩輸を作つて並べたのだ(う)と思ひやる。

・左側の左上に
配置(7下さい)

1,786^p-3/4

由 1176^p-6/8
左端の人形と
同一。



厚真町版 283
笠をかぶった馬丁

千葉県山武郡横芝町姫塚古墳出土
高さ98.0cm 芝山はにわ博物館

7世紀

『埴輪』小林行雄、平凡社、昭和49年8月5日発行、43番参照。

・カ-

・左肩の左下に
彫り置して下を

1,786¹-4/4



582

写真図版 284

笠をかぶり鋤をかつぐ農夫

太田市脇屋出土

・肩に鋤をかついでいるところから農夫とみられるや 腰に小刀をさし、菅笠をかぶり、髪は労働に適した小さい美豆良で結びあげている。

①1785 ②1790-1/6 ③1787-3/3 ④1836-3/3 ⑤1836-3/3 ⑥1836-3/3 ⑦1836-3/3 ⑧1836-3/3 ⑨1836-3/3 ⑩1836-3/3
 ⑪1836-3/3 ⑫1836-3/3 ⑬1836-3/3 ⑭1836-3/3 ⑮1836-3/3 ⑯1836-3/3 ⑰1836-3/3 ⑱1836-3/3 ⑲1836-3/3 ⑳1836-3/3
 ㉑1836-3/3 ㉒1836-3/3 ㉓1836-3/3 ㉔1836-3/3 ㉕1836-3/3 ㉖1836-3/3 ㉗1836-3/3 ㉘1836-3/3 ㉙1836-3/3 ㉚1836-3/3
 ㉛1836-3/3 ㉜1836-3/3 ㉝1836-3/3 ㉞1836-3/3 ㉟1836-3/3 ㊱1836-3/3 ㊲1836-3/3 ㊳1836-3/3 ㊴1836-3/3 ㊵1836-3/3
 ㊶1836-3/3 ㊷1836-3/3 ㊸1836-3/3 ㊹1836-3/3 ㊺1836-3/3 ㊻1836-3/3 ㊼1836-3/3 ㊽1836-3/3 ㊾1836-3/3 ㊿1836-3/3

①あるいは、
 ②中国南部（今の海南島）の儋耳、珠
 崖の民（次項参照）と同様、
 ③我が

④国の庶民は、男も女も皆、
 ⑤単衣（裏のつかな

⑥いひとへもの）のような服を作り、其の中央に穴
 ⑦を穿ち、その穴に頭を貫いて着ていたのだろうか。

⑧たとえば、魏志倭人伝の先述の箇所を、こ

⑨う解釈してみたい。

⑩「其の風俗（支配階級のみならず、被支配

⑪階級も含めて）淫ならず。（庶人の）男子は

⑫皆（冠をかぶらず）露紒（むき出し）にして髪

⑬を結ぶこと、木綿を以って頭に招け、其

⑭の（下）衣（下着、フンドシ）は横幅、但々

⑮結束して相連ね、路々縫うこと無し。婦人は

⑯被髪屈紒す。（男も女も）單被の如き衣を作

⑰り、其の中央を穿ち、頭を貫いてえをえる。

⑱すなわち、三世紀ころ、

⑲一般農民らの男女の衣は、共に

⑳貫頭衣だ

㉑ったのであろう。

㉒と想像される。

㉓貴人に仕えた馬丁の「筒状袖付き

㉔の「衣服」が、貫頭衣だとは考えにくい。（写真図版283（馬丁）参照）

㉕貴人の身近かに仕える者には、それなりの衣服が与えられただろう。

H30(2018)4.29(日)~4.30(月)
H31(2019)1.9(水)~1.10(木)
令和元(2019)6.12(水)~6.14(金)

令和2(2020)1.19(日)~1.21(火)
令和2(2020)10.4(日)~

1.787P-3/3

502

17P

1304P
そのうちかい
「あいつ」P
1787P

1/5
1/4

はな。あつたのかも知れない。
原文には、其下衣横幅
れていた。
(2) いかし、魏略の作者である魚豢は、原文の
意味するところを充分理解できず、
へ倭国の男の衣は横幅、倭国の婦人の衣は
貫頭衣✓
(3) 魏略を参照して編纂された魏志倭人伝を始
めとする諸書には、当然のことながら大同小
異の似たような事柄が記載された。
この物語では、ともあれこゝでないかに
うした経緯があったのだろうと考えてみる
と、たいてい